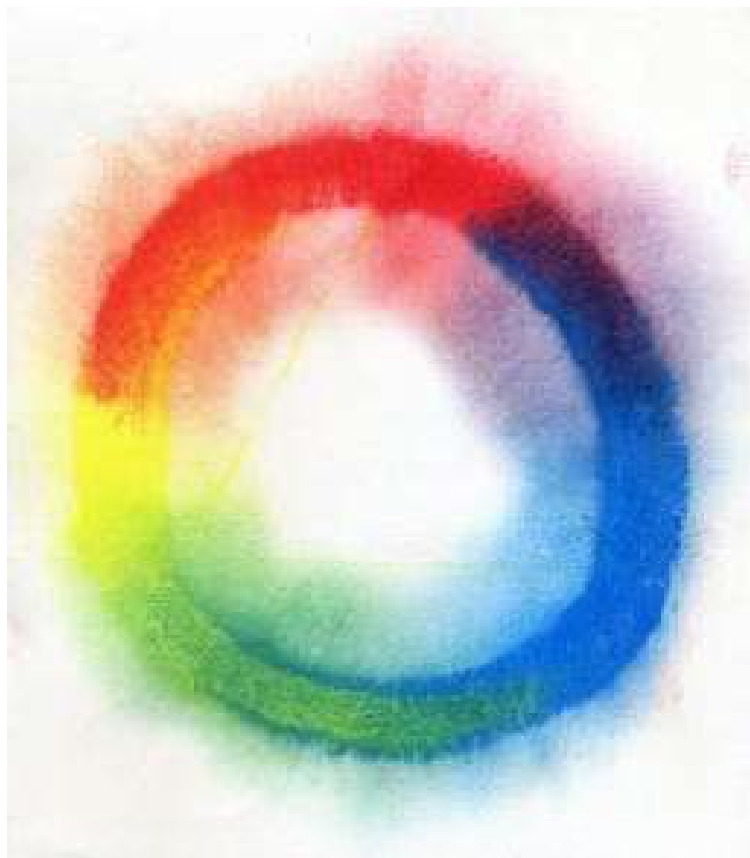


虹 彩 法 (虹の贈り物 編)



—出逢い—

1996年10月28日、北海道霧多布岬でのこと。

その日は未明から海に映った月明かりに見とれながら長い間夜の海の景色を楽しんでいました。

それは天の高いところにあった月が西の地平線に沈み東の水平線辺りがほのかに白み始めたその頃であったと記憶しています。

海も陸も360度が真っ平らに見えるその場所で境界線に沿って現れた天球を包む虹を見ました。

それは空に向かって広がりながら一番高い天上の辺りまで淡い紫色に染まっており、気がつくとも自分も風景も全てが虹に包まれていました。

『あー、これが自然を現す色なんだ！！』と、その時私は虹に包まれたこの星をイメージしておりました。

こうさいほう
—虹彩法—

絵を描くといえばデッサンをしてから色を塗る…と考えるのが普通であり、色から描いて形を現す、といえはなにか奇異に感じられるかもしれません。

“^{こうさいほう}虹彩法”と名付けたこの描法は通常行われる描法とは違った観点に立ち、まず色を描いて行くことから始めます。

何故色から描くのかといえば、自然界の方には元々線というものが存在していないということが挙げられます。

線とは人間が自ら作り出す概念であり、自ら、そのように見ているという証を立てると云うことであり、当の自然界はどうかというと、線と見えていたものの中からは、観察するほどに隠れていた様々の色彩が現れてくる一、という具合になり、その違いは正反対にあるもののようです。

そこで、この描法はその色彩の方に重点的に目を向けることによって、今まで行われてきた絵の世界に、新たな一面を提示できるのではないかと考えております。

雨上がりの大空に架かる虹は何故人の気持ちを捉えて美しいのでしょうか。それは『私たちの内面（心の中）にある色だから…』と考えることは夢物語の

絵空事なのでしょうか。

自然界にはこの虹の色が鮮やかに輝く姿でお互いを損なうことなく浸透し合い満ちている様を観察することができます。

ここでいう「虹の色」とは物質に着色した、あるいは定着した色のことではなく物質から自由になろうとする「光の描く色」を指して言います。

通常、色といえば物質に定着したものを言い、ここで扱うクレヨン（オイルクレヨン＝通称、オイルパステル）も物質の色であるため自然界に浸透したこの「光の描く色」を描き現すことはできません。

描いたものはあくまで物質的な色であるに過ぎません。

しかしこの物質の色は、人の意識によって物質性を越え出て精神性へと高まっていくことが可能であると言えると思います。

光の色と物質の色の違いについては後述致しますが、ここでいう精神性と物質性の違いは絵に感動を覚えた経験をお持ちの方であれば、ご理解頂けるものと思います。あえて言わせて頂くなら、物質ではどうも現し得ないであろうというところに何故か人の気持ちは引きつけられて行き、そうゆうものに出逢ったとき自分の意識もしていなかった深みから共感する動きが噴出してくるのでありますが、それは、何かによって与えられているだけではなく、何かによって突き動かされ活動するものが自分の中から現れて来ている。というところに、物質性を越え出た内容を汲み出すことができるのである…と言えると思います。

話を戻して…「虹彩法」はこの自然界にある「光の描く虹の色」を一色一色分けて取り出す試みから始めて行きます。

これは自然界にある光の色彩が絵の具のように混ざった状態であるのではなく一つ一つの色が独立した状態で、重なり合い浸透し合った姿として観察することができるから、という理由によります。

この姿は自然界のありのままの現れであり、混ざってしまう（混色した状態から元の独立した色として取り出せなくなる）のは絵の具の特性であると言えます。

自然界にあるこの「光の描く虹の色」はあらゆるところで重なり合った姿で現れますので観察はその一色一色を選び取りながら進んで行きます。

自然界の色彩からは多くのことを学ぶ事ができますが、しかしその色を描き現そうとしても、観察の当初はそれら虹の色が沈黙を続けるということもままあります。

それは自然界の色がシンプルに見えながらも複雑に重なり合い、しかも移ろいやすく、私たちの目がその動きを追うことに全く慣れていないからということが出来ます。

私たちが普段何気なく見ている空の中には実に様々の色を観察することができます。

それは通常平面的に現される色と違い、そこには奥行きや運動といったものも観察することができます。

これは遠近法的な手法で作られた奥行きという意味ではなく、例えば一枚の葉っぱの中には葉っぱの厚みを遙かにしのぐ色の深みを観察できる一、といったものです。

また、人工的に作られた照明の下と太陽光線の下とで作られる影に現れる色彩を比較してみると、太陽の光の下に現れる影の中では、どの色も実に美しく鮮やかなバランスを保っているのに対し、人工の光の下に現れる影の色は全体にバランスを欠き色どうしの浸食と思われる現象が見てとれます。

空をじっと観察しているとき、この自然界の色の深さとは個々の色の重なり合いと交わり合いによって生じる現象であり、また動きとは高揚し衰退し生成し破壊されたもの達が融合し変容して行く瞬間瞬間のドラマであろうという思いが湧き上がり、やがて肉眼で見える物質よりもさらに緻密な粒子の活動が感じられ始めると、自然界の空間とはこのような出来事に満ち溢れながら創り出されているのではないだろうか…という思いと共に空の高い場所を目指して羽ばたく内的な翼を感じます。

このような神秘に包まれた自然界に繰り広げられる光の色彩に思いを馳せながら、その観察と描写を繰り返し試みて、色彩の本質であるものに近づいて行きたいと考えます。

－自然界の色彩－

自然界の色彩は観察する者の意識によっても見え方が異なるということもできると思われます。

止まることなく活動する自然界の色彩は、移ろいやすい自分自身の意識に似ています。

それは観察が進み自然の色彩に慣れ親しむほどにそのように感じられてきます。

しかしだからといって実際の観察が安易に解り易くなって、いつでも思う通りの絵が描けるようになる、というようなことにはならず逆に慣れてしまったことにより自分の思い込みに走ってしまい、画面上の色彩がにっちもさっちも行き場を失って濁ってしまう。ということになってしまったり、あるいは逆にそれまで見えない壁となっていたものが突然取り払われ、それまでと全く違う世界が展開し始めたことで、それまでの自分のものであった手法を一新しなければならなくなったりと…、自分の望む思いとは逆の結果ばかりが現れてくるのであって、制作においては身につけて行くそのような囚われを、唯々注意深く取り除くことが求められます。

常に自然界とは、自分が青を欲すれば青が現れ黄色を欲すれば黄色が現れ赤を欲すれば赤が現れるといった、自分の内面に依存した姿となって見えてくるため、描き手が自分の概念でもって空は青以外の色であってはならないとか、太陽は黄色以外の色であってはならないとかあるいは、いや太陽は赤でなければならぬとか決めつけてしまうと、人と人とのコミュニケーションは大変不自由なことになり、たちまち自然の姿とは別に作られて行く人間関係の問題の方に頭を悩まさねばならないことになってしまいます。

実際にこんな話を聞きました。

…ある人が小学生の時、学校での絵の授業の際に空を見ていたらそこに黄色を発見して空全体に黄色を描いたそうです。すると先生から、空の色は青色であるとみんなの前で注意を受けました。その日以来その方は、絵を描くことに大変苦手意識を持ってしまったそうです。

おそらくこのような経験により、幼かった時期に絵を描くことに苦手意識を持たれた方が大変多いように見受けられます。このことは実に由由しい問題ではありますが、しかしこの時どちらが間違っていたかなどと断定を下すことをしてしまえば結果は益々悪くなってしまいます。

そこでもしその時、その人の観察が空だけに止まらずに風景全体にまで広がって『黄色は様々な顔を持ってあらゆる場所に見つけることができるではないか！』ということになれば、苦手意識は密やかな楽しみへと変わって行けるかもしれません。

空を例に挙げれば…日中の青く輝く空全体であったり、あるいは白くはつきりと浮かぶ雲であったり薄い霞状に広がる雲の中であったりと様々ではあります。黄色や紫やピンクやオレンジといった青以外の色が、処により鮮やかに処により緩やかに観察されます。

その現れ方は実に捉えようがなく、時間帯や季節、大気の状態にもよりますが、観察するその人の心の状態にもよる…としか言いようがないくらい、まるで生き物のように変化するそれらの色を観察することができます。

日の出前、夜の帳とぼりが白み始めてその幕は開かれて行きます。やがてそのわずかな光は徐々に黄色を帯びながら輝きを増して夜の帳の中へと浸入しながら、同時に退潮して行く帳の中からは鮮やかな青が姿を現して行きます。

そして空全体は明るさを増しながらこの朝の“時の色”全体が黄色の輝きに満たされながら雲は紅色に染め上げられて一日のその清らかな始まりが喜びに溢れたエネルギーに満ちていると、感じるすることができます。

この高まり行く“時の色”に染まりながら東の空の黄色の中からオレンジが現れ、その中心から湧き上がるように赤が昇ってきて一日の始まりのその瞬間に近づいて行きます。

上昇して行く高まりはやがて、訪れる者に道を譲るかのよう、あるいは生まれ来る者を息を潜めて待つように静まると、その中から鳴り渡る合図とともに、遂にこの静寂の時を破って、その色彩の根本である放射する光が厳かにその姿を現して行きます。

この時この「時の色」に注目すると、高まり行く黄色という喜びに染められて行く朝はやがてその姿を活動するものへと変えながらオレンジがかって行き、日中一番日の高くなる頃には焼けるような輝きの中に赤本来の姿である最大の生成と最大の破壊を含んだエネルギーを感じることができます。

こうして一日の移り変わりの中で最高潮に達した「時の色」は徐々に衰退を始めると午後にはその強い光に影が差している様子を感じることができるようになり、黄昏の時を迎える頃には哀しみにも似た愛慕に漂うパープル（赤紫）がその姿を現し、日没の頃には西の空を染め上げる茜色の中に懐深い紫の浸透を感じることができます。

こうして日の光が退潮して行く中、やがてどこまでも深い闇の中から現れた群青に誘われて夜は深く青く沈んで行き夜独特の活動が始まります。やがて、闇の深さが満ちて夜の活動も終わりを迎える頃には、閉じ行く闇の中に身を沈めている緑の姿を認めることができるようになります。

このようにして一日の中を刻々と姿を変えていく「時の色」（しかも、この一時一時の「時の色」、自体もその中で変化していることが感じられる）、に染められながら、私たちの知る風景の色彩も織りなされていることに改めて思いを馳せるとき、自分もまたこの懐深い自然に抱かれていることに思い至り感慨の念を禁じ得ません。

自然の光の中でのスケッチが進むにつれ徐々にものの周辺を包んでいる虹の色を観察できるようになります。

そしてそれらの色は影の中にあっても緻密に透明に輝いている姿で見えてくることが明らかになって行きます。

そのときこれらの色は肉眼で見ていると云うより、もっと心に近いような内側の目（心の目）で見ているように感じられると例えた方がよいのではないかと思われます。

このように書くと何か特別の色で特殊な目を持つ人しか見ることができない色ではないのかと想像されるかもしれませんが、スケッチの現場ではよくよく注意して観察したときには概ねそのうちの何色かは直ちに観察できる事の方が多くあります。

特に先にも例として挙げた小学低学年くらいの頃には、既成概念で固まった

大人の頭よりは遙かに柔軟な感性でそれらの色を観察することができるということができます。

例えばある観光名所に向かっていたとして、そこで突然目の前に広がった光景に、一瞬息を呑む瞬間があったことを思い起こして頂ければ（観光名所に限らず散歩の途中であつたり）この瞬間には囚われのない自然の色彩が肉眼に止まることなく心の目にまで届けられていることが考えられます。

しかし、この“光に溢れる色彩”は先にも触れたように留めて観察することができないために掴もうとした瞬間にはすでに取り逃がしてしまい、もぬけの殻となった心の場所に自分で創造したイメージを埋め合わせる。という状況になります。

繰り返しになりますが、このように物質に縛られない“光の色”を通常概念で捉えようとしても色は何も語ってはくれないでしょう。

その時例えば『緑の色は黄色と青によって作られる』と、どこからか持ってきただけの概念でもって絵を描き出すときには、自然界の“光の姿”が絵の具の上でどのように変化しているのかが見えなくなってしまう。ということが危惧されます。

これは、自然界にある光の姿を“概念化”するということは色彩を“物質化”して行くということになり、それは“光の性質を失って行く”ことなのだ…という事実が考慮されなくなってしまうということです。

これは見方を変えれば、自然の風景や花々を描き現し作品化して行く作業とは、意識的であるにしろ無意識的であるにしろ、この過程を辿りながら、そのとき無意識的に関わっていたら気づかれなかったであろう“出来事”に、意識的に関わることによって導かれて行く…と見るのであります。

つまりこの意識的な選択によって、描くということは、表現の内容となる苦難を伴う様々の“出来事”の中をかいくぐって行かなければならなくなる。…のであります。

“光であつたものが光を失う”という出来事とは、一体どういうことなのか？そこには一体何が生じているのか？

この時から、この問いは、人間の内面を問う自問自答の牙となって、その探求の度合いに応じて容赦なくその人自身の中にその答えを求めて突き進むものとなるのであります。

一方このような事に関わることなく、意識的に無感覚に、あるいは無意識にこの問題の前を通り過ぎるときには、先の問いの吟味が為されぬまま、素材は絵の具のままの状態に乗せられて行く事になる…とすることができます。

この時、幼児の描く絵を上述の内容と混同するのは見方の誤りとなりますので、その点に触れさせて頂きます。

幼児を含む子供は、このような大人の身につける“観念”に関わる以前の段階にあるのであり、子供の思考は、脳を経由して営まれる大人の思考方法とは異なり、遙かに直に素材そのものに触れていると考えられるのであって、そこには、素材の秘めた“光”を見ているのであります。またそうであるから、子供の時に見て感じた記憶はその人の心の核にまで浸透して、大人になっても尚消えることなく生き続けるのであらうと考えられるのです。

子供の絵が天才であると言われる所以は、全て感じたものを感じたままに現している、と云うところに見出し得るのであって、子供にとってそのことは最も自然な出来事なのでありそれは、生きるための創造する喜びなのであります。

すると、子供に大人の喜ぶような絵を描かせようとする事とは、この天才を否定し創造の芽を摘んでしまう事にもなりかねない危ういことなのであり、子供が本当に喜んで描くものを理解して行くところに、始めてその創造の芽の成長発展する姿を見届けることができるようになるのだ…とすることができると思うのです。

話を戻し、思考という脳の活性化でもって世界を見るようになって行く大人になり“光であったもの”から失われていった“光”とは一体何であるのか、が初めて問われだすのであり、ここから“生きる”という問題が生じてくる、と考えられます。

この“生きる”という内的問題から辛苦は生じるのでありこの問題を避けるときにはその度合いにより“生きる”という問題は外的要因に渡され、問題は自分の内にはではなく、自分の外に原因を探す結果となって行きます。

この外的要因となった問題は、外的要因が変化する度に新たな辛苦の姿をとってその人間に襲いかかり、常にその原因となった元にある問題をどんどん深い暗がりの中へと隠し続けるものと化します。

一方、内的問題となった“生きる”という問題はその内に問題を内包しているために、その問題を解き明かすことにより、その問題の真の姿も明らかとなり得ます。このようにして、真の姿とは、幼児の頃見ていた世界のように徐々にその姿を明かして行くのであろうと考えます。

“生きる”という問題は、こうしてその人の努力の成果として、辛苦という“影”の要素の中から“光”の要素を見出して行くことだと考えます。

つまり、光である自然界の色彩を、光を失った絵の具という素材で描き現そうとする試みとは、内的要因である“自分自身”の中から“光”となり得る素材を見出そうとする、どこまでも意識的な作業であると考えます。

この意識的な作業の中から生じる辛苦を克服して行く過程は、同じ内容を抱える者に認められ共鳴共感する。

この目に見えない作業が素材を通して証されるからこそ、人は感動を覚えるのではないのだろうか。

自然の光は人の手により一旦その光を失い、人の内的営みを通じて再び“内的光”として変換され得るのであり、この過程を芸術は問題にするのではないのかと私は考えたいのです…。

そうして、失礼極まりない意見を言わせて頂いたこともかつてありました。今更ではありますが、その方々にはお詫び致します。

少し話を戻しますが、これから先、危惧される問題に触れさせていただきます。

もし絵の具が、下にある色を損ねることなく重なり合うことができたとしたら、見た目には自然に近い輝きを描き現せるのかもしれない…。

それは照明を使った舞台の演出やテレビの原理に応用されている光線を利用した重なり合いのように—

しかしそのような便利な絵の具ができたとしたら、先に述べたような表現の内面である人間の意識的な作業は失われ、人は絵の具という素材を通して“意識を高めて行く道”を見失ってしまうことが懸念されます。

将来においてテレビのハイビジョン化がさらに進み、益々自然と見まがう映像が広まるにつれ、人は内的作業を忘れてしまい（それはイメージする内容がやせ細ってしまい、生きることそれ自体が危険になって行くと考えられるところから）イメージの中に“光”を見失い“事実”を“映像の与えるものの中で判断してしまう”ということが危惧されます。

イメージすることは、何かの大容量の情報を得たときに働くものではなくて、限られた容量の素材を別の素材と組み合わせたり、合体させたり、反発させたり、その情報をいじり回せるところに湧き出すのであって、扱える容量を超えてしまうとそれは危うい方向へ向かっているにもかかわらずコントロールができなくなると云うことでもあろう…。

只、そこで難しい問題になるのは、では、自分が一体どれほどの容量を取り扱えるのか？ということだろう。

ここを識るためには、識るための過程を踏まねばならない。

それには、常に足元の見えるポジションに自分自身をコントロールできる技を身につけなければならないのであるが、これが人生の課題でもあるのだろうか…なかなか上手くは行かない。

話を再び戻して、

映像という素材は、造る側の内的な営みによって“表現”に高められ、見る側の内的作業によって“光”に変換されるときにその目的は最もよく達成されるのであり、映像を通じて意識を高める選択が見失なわれぬことを切に祈るばかりであります。

…では、ここで言う“光”とは一体何であるのかという問題を別の視点から考えてみたいと思います。

自然界の色彩に目を向けてみると、そこには前述のような光の色彩を観察することができます。

その姿は美しく、バランスがとれており、その美しさやバランスが見る人の心の中に喜びという明るさを創り出しているのだと云うことを、その人の程度に応じて感じることができる、と云うことができると思います。

つまり人は、自ら見出す内的な喜びに明るさを感じるのであり、それは外光そのものを感じる明るさよりも遙かに親しいものであり、現代の中であって、人はここに“光”を求めるのではないかと考えられます。

人にとって自然とはこの内的な喜びに繋がる出来事を無限に多く隠し持つ存在であり、人はその出来事を見つけ出す毎に“光”を感じることができるのではないかと思われるのです。

この自然の美しさは探求するほどに奥深く、その奥深さによって人は“内的な光”へと誘う細き道を見出して行くのではないのでしょうか。

この時に人は、この自ら見出す内的明るさを通して、自らの内に広がる深い闇の中から現れ出す“光”として“自ら”を見出すのである一。と考えられるのです。

こうして闇の正体を見出したときから人の中に、日々日常の中に生起している出来事の事実の姿が徐々に明かされていくことになり、それは『日常のなかにある隠れて見えぬ闇（不安）とは、まだ認識されずにそこにある“自分”なのであって“自分”の認識こそ“光”の正体である。そしてそれは自分の力によってのみ達成され得る出来事なのだ！』という強い自覚と認識の中から生じる意志の力となって“日々の自分”との戦いに挑み続けながら、その“内的光”を強めていけるに違いないと信じます。

但しこの“日々の自分”において実践される内的な作業は、その日々の中こそ達成されてその成果（実り）を見なければならぬものでありますが、しかしながら、このような意識的な作業を日常の多忙な中に持ち込む事とは、日常という外的流れの中に裸の自分をさらすということであり、日常の全てにおいて、早速そのことを実践しようとしても、始めから無理が生じることであり

ましょう。

そこでまずは、日常を離れた意識の集中できる場所を別に設けて（日常の雑多な意識を離れることのできる場所であればそこでよい、という意味で）一つの出来事に集中して、その探求からくみ取ったものを徐々に日常に持ち込み広げて行くという方法が、現実的ではないかと思われます。

“虹彩法”は、その一つの方法として自然界の“光の描き現す虹の色”を取り挙げ、スケッチという非日常的な実践を通して、様々に日常を探求して行く技を身につける“場”としてつけた名です。

—虹の贈り物—

自然の中で色彩を観察して行くと、自然の色彩の世界とは全体性の中にその個性を現そうとしているということに気づかされます。

虹の色は赤と青と黄色の三つの色により現すことができますが（下図参照）



この三つの色とは探求するほどに、その性質の違いも明らかとなります。それはここに描かれた色の違いでもお判りになるのではないかと思います。この場合、明るさの性質を持つ黄色から赤に至る部分と紫から緑に至る影の性質を持つ部分の違いは、絵を描こうとする際にはおそらく、どなたにも判断できるものではないかと思います。

また、先述しました「時の色」を思い描いて頂ければ黄色から始まる一日の色の移り変わりを季節の色の変化になぞらえてイメージして頂けるのではないかと思います。

新しい命の始まる若葉の芽吹く春の光の色は一日の目覚めるその色になぞらえることができます。

やがて若葉を付けた木々は、次第に活発となる夏の光を浴びながらぐんぐん成長を続けて、秋の懐深い光の中ではそこに実りを結んで衰退を始めて行きます。

そして冬、深い眠りに誘われるように沈んで行くと、そこで春の目覚めを待ちます。

さらに春に芽を出した木々の若葉の色とは、光の表現である黄色と、水の表現である青との協力の成果であり、夏の太陽に焼かれた緑は、その中に熱の表現である赤を吸い込んでその色をいよいよ深い緑に変えながら、秋にこれら三つの色は結び合うことによって実をもたらし、冬には解け合って、土の表現である三つの色の浸透し合った姿となって還って行きます。

このようなことがらを、この色相環（ゲーテが考え出した自然の色の繋がりを現すイメージ）を放射状に擦って現れる虹の姿を使って、太陽の内的活動の現れとしてイメージすることもできます。

さらに、黄色という色は、赤色という色は、青色という色は単独で成り立っているのではなくて、他の二つの色によって初めてその色として自立できるという事実を見るとき、この関係こそが個性というものを支える源なのであり、個を考えることとはすなわち全体という姿を認識するための方法でもある。と言うことができます。

ところで、闇の色とされる“黒”とは、この三つの要素を最大限に混ぜ合わせたところに現れる様子のことであるとは考えられませんか？

(このような理由から、当スケッチ会では、黒はある時から使用しないことに致しました。)

自然の色彩界は美しい調和に貫かれており、人は自己の内面にある思考と感情の力によって、この調和の中に意識的に関わりながら、その体験を通して得た実りを携えて、再び何度でもこの現実の中に出て行って、自己の内的な戦いに挑み続けながら、その本来の目的である「自分自身」の中に「光」を見出して行くのであらうと信じています。

この日常の中こそは、自己の偏見や囚われの渦巻く内的世界の表れであり僅かずつしか進んで行けない「試練の場」であります。

しかし、色彩体験を通して会得される『色彩とはただ外なる自然界の中に広がっているだけのものなのではなくて、それは自分の内なる世界に向かって開かれている扉である！』という認識は、間違いなく日常の闇（不安）に光を投げかける契機になるものと信じます。

青空の秘密は、緑の葉っぱの秘密は、その色彩の中に記されており、人とはやがてその内的な営み（個性）によりその神秘の扉の向こうにあるものを証しながら、自己の内面を強化しつつ全体に関わる者となる一。なのであると信じています。

2005年3月28日 初版

2011年3月30日 改新版

瀬崎 正人